
闇とマテリアルの王

TestAlicia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇とマテリアルの王

【コード】

N3409Q

【作者名】

TestAlicia

【あらすじ】

舞台は闇の書の残滓が引き起こした事件が解決した海鳴市。消えたはずのマテリアル達とはある少年と出会う事になる。少年とマテリアル達はどんな生活をしていくのか？ - - 初投稿になります。いろいろとおかしなところもあるかもしれませんが、お付き合いいただけるとうれしいです。

バトルパートも入ったので「R15」「残酷な描写あり」の警告タグを付けることにしました(5/5)

キャラ設定

御架月 紫苑

マテリアルたちを拾った人物

聖祥大付属学校に通う小学校3年生

家族はなく一人で暮らしている

一人暮らしのため家事は得意なほうである

星光の殲滅者

闇の書の残滓が生み出した構成素体で「理」を司る

なのはに似ているが、髪型がショートカットで衣装は赤と黒

言葉づかいは丁寧で落ち着いているが、言うことは物騒である

2

雷刃の襲撃者

闇の書の残滓が生み出した構成素体で「力」を司る

フェイトに似ているが、髪と衣装に青が多い

一人称が僕ではきはきとしゃべる

言葉づかいは年相応で子供っぽい

闇統べる王

闇の書の残滓が生み出した構成素体で「王のマテリアル」

衣装は黒くが多く、帽子はかぶらない

一人称が我といい、自らを王、他者を「下郎」「塵芥」などと、はやてのことは「子鴉」と呼ぶ。

ただし紫苑に対してはそれほどでもない

キャラ設定2(10話以降)(前書き)

9話で今回登場したユエと紫苑の補足です

キャラ設定2（10話以降）

御架月 紫苑（その2）

自分の中にもうひとつの人格を持つ

実は記憶をなくしていき始めての記憶からユエと共に生きている

マテリアルのことは性格上から受け入れたのもあるが

彼女たちの正体などをユエによって知らされていたため何も聞くことはしなかった

本人は一応全てをユエから教わり自分の中で整理している最中

外見上のイメージはスパイラルの鳴海歩

ユエ

紫苑の中にいる意識だけの存在

紫苑の記憶の始まりから共にいて紫苑の全てを知る者

マテリアルたちのことも知っていたりする

物語のキーパーソン

外見上のイメージは男版リインフォース

リインフォースの上着を取ってミニスカが長ズボンに変わっている

更に格闘戦での両手を保護するためにガントレットをしている

キャラ設定2（10話以降）（後書き）

今のところはこんな感じとなっております

次回以降魔法や独自設定を出したときにまたこのように纏めますので。

簡単なものとなってしまうので、参考程度に読んでいただければと思います。

物語の始まり（前書き）

初めての投稿になります。更新が遅いと思いますがよろしくお願
い
します。

物語の始まり

私たちは今の夜天の主たちに負けてしまった

そう、そのはずだったのですが…

「いったい、どういうことでしょうか。これはいったい？」

私は確かに倒され消えたはず

それが今は何もない山の中にいる

それも近くにはなぜか同じく倒された力と王がいる

とりあえず私は二人を起こし現状把握を試みる

「二人とも起きてください。すこしおかしな状態なので調べたいことがあるので…」

そうして声をかけてみても特に反応がない

「起きてください…二人とも…そうですか、起きないならば仕方あ

りませんね」

私は自身の相棒を呼び起こす

「いきましようルシフェリオン。今の魔力でも起こすくらいなら問題はないでしょう」

そうして魔法を使う

「パイロシユーター…これで起きてください!!」

私は二つの魔力球を作り力と王の二人にぶつけ起こす

「うわぁ!!」「いたっ!?!」

「目が覚めましたか二人とも?」

私はルシフェリオンを二人に構えて尋ねる

これが私の中の理性がさせる行動だった

「う、うん!!」「私も起きたぞ!!」

「そうですね。ならいいでしょう」

二人が起きたので私はルシフェリオンを解除する

まあ、解除しなかったところでそろそろ魔力切れだったのですが

とにかく当てにはならないかも知れなくてもこのあとのことを考えるのに二人は必要

「私たちの今の状態ですが…なぜこうなっているかわかりますか？」

「理がわからないなら僕がわかるわけないだろ！」

「なぜそう自信満々なのかはわかりませんが…王はどうですか？」

「うむ、私の予想でよければだが完全には消されなかった。ただそれだけだろう」

「消えなかった…ほんとうにそれだけだと？」

王が話したことは私も考えていたものではある

だけど私はもう一つの可能性を思いついている

それは闇の書から切り離された私たちにはありえないはずのこと

暴走したプログラムがすでにほとんどを変えてしまい私たちはもう消えるはずだった

けれどももしも最後の一つの可能性が残っているのだとしたら

「もしかしたら…ですが」

「なになに、何か思いついたの？」

「とても確立としてはあり得ない話です。それに…」

「何か懸念事項でもあるのか？」

「いえ、ただそれは私が望んでいるだけのことではないのかと思ったので」

素直に話せば王や力は私を笑うだろうと思いつながらも話す

すると二人は以外にも真剣に聞いてくれて

「…笑うと思つたのですが？」

「笑うなんてできないよ。僕だつて今いることに願いとがあるもん。王さまだつてそうでしょ？」

「む、確かに我にも望んでいるものはあるな。だからお前のことを笑ったりはしない」

「そうですね」

私は二人のことを知っているようで知らなかったのかもしれない

理の名を冠し、理で動く自分には理解できていない部分があったの
だろう

「それで、お前の望とは何だ？」

「私の望み…ですか。私は…」

その時私の背後にあった木のあたりに人の気配を感じ、とっさにル
シフェリオンを向ける

「誰ですか！！」

「えっと…君たちのほうが気になるんですけど？」

そこにいたのは私たちのオリジナルと同じくらいの男の子

それは別に怪しくも何ともなかったのだがなぜか胸がざわつく

「あなたにようはありません。この場から立ち去ってください」

「でも…君たちけがしてるみたいだし」

「っ！…あなたには関係ありません」

なぜなのだろう…この人にはなぜか反応してしまう

一言一言をなぜか気にしてしまう

「でも女の子が怪我してたら普通の男の子だったら助けると思うよ」

「それでも、あなたは関係ないでしょう」

「でも…それでも、治療くらいは僕のところまでやっていかない？」

「私たちは闇です。…人に関わってもらわなければならない」

「僕は自分の力で飛ぶんだ！君からの施しなんて」

「我はお前のような塵芥などに憐れまれる必要などありはしない」

なぜここまで食い下がるのでしょうか？

別に彼に理はないはずなのに…

「なぜ…ですか？」

「ん？」

「なぜ、あなたはここまで拒否されながら私たちに食い下がるのです？」

そう、普通の人間は拒否されることを恐れる

そうして恐れていき、すべてを失った結果、狂った人間たちが力を求める

そんな人間が今まで闇の書を使ってきた…私たちを生み出した

ならば彼は一体なぜ…

「拒絶されることはなれてるからかな。僕は善意の押しつけが得意だし」

「なれてるの？」

「うぬのような年でそこまで悟っている子供も珍しいな」

「あはは、そうかも」

なれている？

そんなことはありえない

何を考えている…それとも本当に…

「どうせ今なら僕の住んでる所は誰も来ないし、知り合いもないから来てくれても困らないよ」

(…どのみちある程度の期間は休息を取らねばならないが)

(ねえ理、どうせだから利用しておこうよ。なにかありそうだったら闇の糧にすればいいし)

(…あなたが望むのもそれだというのですか?)

それが二人の願いであるなら私の願いとほぼ相違ないだろう

(ぼ、僕は今は休みたいだけだよ！)

(わ、我も別にこいつを認めたくわけでなく休んでいただけだ!!)

(わかりました…2人がそう望むなら)

そう二人が望んでいたことは静かなる平穏

闘いを続けている私たちにとって力がない今はゆっくりできる時間が一番

それも私たちが心地よく思える相手とともに

私も休んでいたい…そうならば今とるべきことは一つ

「あの、いいでしょうか？」

私は立ち尽くしている少年に話しかける

「うん、どうする？」

「そちらが迷惑でないというのならお願いしてもよろしいでしょうか？」

「いいよ。えっと、そっちの二人も来るんだよね？」

「ぼ、僕は理が行くから行くんだよー!!」

「我も同じだからな」

「そっか、じゃあ気楽にしてくれていいからね」

「…ひとつだけ言うっておきます」

「一応これだけは言うっておかない」

私の中での線引きをするためにも

「私はあなたを信頼したわけではありません」

「うん、それがいいと思うよ。ほかの人に拒絶されて生きている人が急に人を信じるなんてできないしね」

「…あなたはそれでいいんですか？」

「？僕は困っている人を助けることができるなら全然気にしないから」

この人はおそらく自分より他人のみを優先するのだろうか

それは私のオリジナルである高町なのと同じような…

「とりあえず僕の家に行こうか。今後のこととかはそこで話すとい
いよ」

「そうさせてもらいます。では王、力、行きましょうか」

そうして歩き出す

まだ魔法のことは伝えていない

それに本当に彼を信じているわけでもない

「ただ私の心は今回の選択に何の後悔もしていない」

「そういえば、名前を聞いてなかったけど教えてくれる？」

「…そうですね。名前くらいは必要ですね。私は星光の殲滅者」

「僕は雷刃の襲撃者だ！かっこいいだろう！！」

「我は閻統べし王だ。我の名を知ることができたことを誇りに思うがいい」

「そっか、僕は御架月紫苑。よろしくね」

とにかく今は休むことにしよう

なぜか心休まるこの場所で

いつか私たちが自身が自身のこれからの道を決める時まで

マテリアルと家主（前書き）

二話目になります

今は学校が卒業近くて忙しいので投稿は遅くなると思います…

マテリアルと家主

僕たち三人は一応保護されることにした

というかある少年を利用することにしたのだ

その少年はとってもお人よしの少年

だから僕たち三人の事情を一切聞かない

…本当に何も考えていないのかな

僕たちは闇の書のマテリアル

そしてその目的は闇の所の復活、そしてあの安らかな闇に還ること

そうすれば闇の書を使うことができる

だから少年は僕たちを助けようとしたのかとも考えてしまう

そして今はとりあえず

「えっと、とりあえあずセイはこの部屋。ライはその隣の部屋。ヤミはライの向かいの部屋ね」

「部屋を用意していただき感謝いたします」

少年…ミカヅキシオンの家に到着したらそれぞれの部屋を用意してくれた

ちなみにシオンがいったセイ、ライ、ヤミっていうのは僕たちの名前

長すぎるからこれでいいかな？つてきかれたからとりあえずうなずいた

名前なんてどうせ僕たちが付けたものでもない

どう呼ぼうとその人間の勝手だ

ちょっとだけ、ほんのちょっとだけどライって呼ばれたのは嬉しかった

雷刃の襲撃者が短くなっただけでも違う呼ばれ方、その人だけの呼び方でというのが嬉しかった

け、けどあいつのことを信頼したわけじゃない

最初にセイや王様と話したように力が蓄えられるまでの隠れ蓑

利用するためにあいつのところに来たんだから

コン、コン

部屋の戸がノックされた、それにはいつていいよーと返事をする
あいつだった

「今、食事の準備してるんだけどさライは何か食べたいものとかある?」

「僕を食べ物なんかじゃつられないよ!」

あいつは僕をペットか何かだと思ってるのか!

食べ物を用意されたくらいで簡単に信じたりなんかしないぞ

「そういうわけじゃないよ。ただ、食べるものはやっぱり好きなものがいいと思わない?」

「う…それはそうだけど」

「それにおいしいもの食べれば回復だってはやいんじゃないかな?」

そういつてくるシオンは善意の塊のようで

自分にとって何一つ不満点のないその言葉につなずき

「…あつたかいスープが飲みたい。あ、けどにんじんは食べないからね!」

「うん、わかったよ。じゃあコーンポタージュでもつくることにするよ」

「おいしくなかったら…僕のこの力で君を倒すからね!」

「うん、それは気合入れて作らなきゃね」

そついいながら部屋を出て行く

すると入れ違いのように入ってくる人物がいた

「あなたのところにもきましたか?」

「シオンのこと?」

「はい。彼が…何を考えているのだろうと考えています」

「さあね。僕は力が戻るまでの時間ができればどうでもいいよ」

そう、シオンが何を考えてるかなんてたいした問題じゃない

セイが魔力を持っているか調べたけど高くも低くもない、平均より少し上くらいとの結果が出た

だから僕たちなら向かってこられても大したことはない

…あれだけ心休まるような相手が何か考えてるとも思えないけど

そう話すとセイは驚いたような顔をし

「そう、ですか。あなたがそういうのなら大丈夫なのかもしれませ
んね」

「どうしたのさ。セイが考えたことのほうが重要じゃない？」

「私は理にそって話します。ですがあなたはそれよりも本能などの
ほうが先にきます」

「…僕を馬鹿にしてる？」

「いいえ、あなたのその本能は敵だと認識していない。それは私に
とっては大きな判断材料となります」

驚いた

セイはいつも僕のことを馬鹿にしたような態度だったから

まさか自分の本能のことを自分の判断材料に使うなんて思いもしなかった

「まあ、べつにセイがどう考えてたっていいんだけどさ」

「私にとって情報とはもつとも必要なものです。集めて、その上で理をもって判断、行動する」

セイのその性格についてはよく知っている

なんせもとは同じ物の中にずっと閉じ込められていたような存在
守護騎士たちとも違い、表に出ることなくただただ闇の中にいた

「それにしても…以外というべきかやはりというべきか」

急にセイの態度が変わり不思議に思いながらも聞く

「何かあった？」

「いえ、先ほどのあなたとシオンのはなしを聞いていたのですが」

「料理の話？」

「…あなたはやはり子供なんですね」

「な、何を根拠に…！」

「いえ、闇のマテリアルで別に食べることは別に必然ではない私たちが好き嫌いをするなど」

「だ、だってそれくらい」

「しかもにんじんが食べられないなんて…フフ、あなたはどこの子供なんですか」

セイに笑われるのは正直これが初めてというわけではない…けど

「そんなに…そんなに笑うなら僕はこの力でセイを倒す…！」

そうしてバルニフィカスを起動させてセイに攻撃しようとした

バリアジャケットは着ずにただ戦斧を振りおろそうとした

パシッ

何者かに受け止められてしまった

それにはセイも驚いている

全く気配もせず、僕が本気で振り下ろしたものを受け止めるなんて驚きながら止めた人物を見てみると目元が髪の毛で隠れていて見えない

けれどもかすかに見える瞳にはとても怖い光がともっている

「え、と…シオン？」

「あんまり厳しいことは言うつもりないんだけどさ…」

「は、はい！！」

なぜか今のシオンはとても怖くて、本能が逆らうことを拒否している
そして戦斧をもつ手がなぜか震えている

「僕は君たちの事情なんて聞かないし、大抵の事だったら笑って済ませるよ」

いつの間にかシオンの気迫がすごいことになっている

自分に言われているわけでもないのにセイがシオンの気迫に負けたのか震えている

「でもね、この家の中での暴力沙汰だけは譲るわけにはいかないんだ…」

僕も徐々に追い詰められている…どうしてここまでこの僕が追い詰められてるの!?

「だからさ、少しさ…ね?」

そうして僕は何故か意識がなくなってしまった

次に目が覚めた時には心配そうに僕を見つめるヤミとセイだった

見たこともないくらい心配そうな顔をした二人

けど、僕はどうして倒れてたんだろう?

「セイ、僕はどうして」

「知らないほうがいいこともあります…ええ、あれは」

あり得ないほどにセイが恐れている

いったい何が起こったというのだろうか…

「わ、我も知らんぞ！だから我に聞くでない！！」

まあ、体に不備があるわけでもないから考えるのやめておこうかな

そうしていると部屋の戸をたたく音がしてシオンが入ってきた

「ライは起きた？なら、そろそろ食事にしようか。三人とも降りてきてね」

ふと気がつけば下の階からとてもいいにおいがしている

そして僕たちはそのまま下の階、匂いのする部屋に行く

「さ、好きな所に座って。まずははないと思うから」

そうして用意されているのは結構な御馳走の山だった

小さいけどステーキとかも用意されているし、僕の頼んだスープもある

「じゃあ、いただきます」

そうしてシオンは食べ始める

でもどうしても僕たちは食べるのを戸惑ってしまっ

それで手が止まってしまうのを見てシオンは問いかけてくる

「食べないの？まずくはないと思うから食べてくれると嬉しいんだけど」

そうやさしくしてくれることにどうしても反発してしまう

「僕はこんなもので籠絡されたりなんか…」

「僕はそんなこと考えてないから食べたほうがいいよ？そのほうが体力とかも戻るだろうし」

「うう、別にこんな、の…お、おいしい！…」

シオンの料理はおいしくないどころかとってもおいしい

ふと横を見るとセイと王様も食べ始めている

食事なんてしたこともなかったけどとても楽しくていつの間にか笑みを浮かべていたみたいで

「うん、やっぱりみんなは笑顔のほうが似合ってるね」

そんなことをシオンは恥ずかしげもなく言ってきて僕たちは三人とも赤くなってしまうていた

食事も終わって僕たち三人はセイの部屋に集まっていた

「まだ今日一日しか過ぎていないとはいえ、彼は信用してもいいのではないだろうか」

そう切り出したのはセイ

王様も少し驚いていたけど、その表情は反対しているようではなかった

それに関しては僕も同じで

「うん、シオンは信じてもいいと思う。…それに、やさしいしね」

その言葉は最後のほうはふと漏れてしまった言葉だけど二人は笑わなかった

この日常が続くといいな

たとえ僕たちの力が戻るまでの少ない時間だとしても…

マテリアルと家主（後書き）

平穩が続くマテリアルと紫苑

そんな四人のとある日常の光景とは？

次回はヤミの視点で3話「穏やかな日常」

穏やかな日常（前書き）

マテリアルたちですが口調が一定ではないかもしれません。

とくに閻統べし王はなかなか難しいのです。

ですが気にしないで読んでいただければ幸いです。

穏やかな日常

「そういえばここ最近は魔導の鍛錬がいささか進んでいません」

「それもそうだな。よし、うぬらは私の相手をするがいい」

そうして杖を持ち出し戦闘態勢に入る

それを見てセイとライも同じように杖を手に取る

ただし忘れてはならないこともある。それは…

「じゃあシオン、裏庭使ってるね」

こここの家の主のシオンに裏庭を使うことの報告だ

「いいよ。けど近くに植えてある植物には気をつけてね」

「はい」

これを忘れてしまうと後々大変なことになってしまう

この間セイがライを追いかけていた時に裏庭に入っ
て行き

そこでライがそこに置いてあつた植木鉢を壊してしまつた

その時のシオンの怒りようが半端なく

あのセイが全く反応できずに、ライとともに気絶させられてしまつていた

それ以降、なにかと裏庭を使う時にはシオンに報告をしている

「分かつてるかもしれないけど結界だっけ？それちゃんと使つてね」

「はい、この間のようになるのは私も勘弁したいものですから」

「んーあの子達も別に異変があつたりしなかつたら問題ないんだけどあの時は僕がいなかつたからねえ」

紫苑は家…といっても山の中腹にある小屋のようなもので住んでいるが

その家の近くには様々な自然動物達も住んでいる

紫苑は比較的その動物達と友好的であり、それは紫苑の家に危機が訪れれば助けに来る位である

しかし、今回ばかりはそれが裏目に出てしまい

紫苑がセイと一緒に買い物に出ているときにライとヤミがけんかを
して魔法を使った

小さな魔法だけなら問題も無かったのだろうが、ヤミが何の考えも
なしに広域魔法を使ってしまった

それが紫苑の家の裏庭にあった植物たちを一掃して一部小さなクレ
ーターを作ってしまった

「僕は…君たちが何してたって特に何も言わないよ」

少年はその手に箒を持ち二人の前に立つ

「でもね、僕はここに住んでるほかのみんなに迷惑をかけたくない
んだよ」

「は、はい」「う、うん」

「だから、こんなことがないように……お仕置きしようか」

顔はとても笑顔だった

それがとても恐ろしく…怖かった

今までいろんな人間を書の中から見てはきたがあれほどの怖い笑み

を浮かべる人間を見たことはなかった

それがあつたからこそ今では二人は勿論、我もあやつを怒らせようとは思っていない

「さて、ではいつもどおり順番でいいですか？」

「うぬ。我を一番に闘わせるのであれば問題ない」

「…それは順番の意味がない気がしますけど…いいでしょう」

そうしてライを無視し話をすすめ闘いを始める

「ちょ、僕を無視するなー!!」

そういつている奴など無視だ

「アロン…ダイトオ!!」

「ブラスト…ファイアー!!」

我とセイが勝負をするとお互いの性質上遠距離での大型の撃ち合いとなる

それぞれが砲撃魔法であったり射撃魔法であったり

それにより派手な爆発などが起きる

「わー、いつもすごいね」

「うん、はぐはぐ…でね、もぐもぐ…」

「ほらほら食べながらしゃべらないの」

「もぐもぐ…うん」

いつも思うのだがなぜこの爆発を見ながらのんびりとしていられるのだろう

ライはわからなくてもない。あんなのもマテリアルの一角だ

だがあ奴に関して言えばただの子供だ

しかもこの世界には魔法は存在しないことになっている

いくら我らが安全だからといっても納得しきれるものなのだろうか？

そうして気がそれているところにセイが勝負をかけてきていた

「いきますよ…ルベライト」

それは拘束魔法

これをかけてきたということはその次には必ず大型を仕掛けてくる

「集え…赤星…すべてを滅する焰とれ!!」

「ま、まてセイ!」

「ルシフェリオン…ブレイカー!!」

「おのれえー!」

そうして私の意識は落ちて行った

次に目が覚めたのは日も登りきった頃だった

「あやつめ…手加減をしなかったな」

セイ自身は認めないだろうがあやつはこと戦闘に関しては性格が変わってしまっ

なにかと生き生きして見えるのだ

それにより模擬戦だったとしても今回のように手加減を忘れて攻撃してしまうことのほうが多い

「大丈夫だった？」

「おぬしか…うぬ、たいした問題はないな」

実際魔力ダメージだけだから少し休んだだけでも問題ない

そして自分の確認ついでに二人を捜したのだが

「…？あ奴ら二人はどうした」

「二人ならなんか必要なものを取りに行くと言っただけでどこかに出かけて行ったよ」

「そうか…まあよい」

おそらくは訓練的を作るためのものだろう

この間セイが話していたからおそらく作りに行ったのだろう

「そうだ。このあと何か用事でもある？」

「いや、特に予定はないが」

「今日は買い物にでも行かない？」

「我に指図でもするつもりか！！」

「ち、違っつて。一緒に何か買いにでも行かないかなって思って」

そうだろう

二人がいない家だとこやつと二人きりになる

特にやることもないためこうして何かを提案されることもある

「し、仕方がない。我がついて行ってやろう。光栄に思うがいい」

「うん。じゃあ用意できたら玄関に集合ね」

「了解した」

まあ、こやつには世話になっているしたまにはいいだろう

「そういつて出掛けたはいいもの……」

「どうかした？」

「なぜおぬしは何も考えずに家を出た……」

「あはは……まあ、いいじゃない。こうして何もなく散歩するのも」

「まあ、構わないが……」

こやつは用意してからといった割には本人が財布を忘れたためいきなり当初の目的から外れてしまった

どのみち何かほしいものがあつたわけではないようなのでいいだろうが……

「忘れるものなのか？」

「うーん、結構あるんじゃないかな？僕はよく忘れちゃうことあるんだけど」

「うぬ…まあおぬしならありそな話ではあるな」

特に何かがあるわけでもない、こつしたゆったりとした日常が我らに訪れるとは思わなかった

つい数週間前初めて姿を持ちこの世に形をもつことができた

それは本当に一瞬のことではなかったような時間だった

すぐに管理局やその協力者、そして…夜天の主にヴォルケンリッター

彼らに我らは倒され…消された

だから次にセイに起こされた時は本当にびっくりした

まさか存在が消え去ることもなくもう一度チャンスがあるとは思わなかった

しかもいまだ管理局などに知られることなく力を蓄えることもできている

「考え事？」

「ん…ああ、少しだけ今までのことを」

「そっか。君たちいろいろあったみたいだしね」

そう、いろいろあったしこれからも今まで同様に行くとも限らない
今日模擬戦をした感じであればだいぶ魔力なども本調子に近づいて
きている

その状態であればもうそろそろこの生活に終わりを告げる時が来る
のかもしれない

「ヤミー？」

けどもう少しくらいはいいのだろう

その時が来たら嫌でもセイやライと話し合って決めなければならな
いのだから

二人と決めるまではのんびりするとしよう

「我を置いていくとは何事だー」

「ヤミがいつの間にか止まってただけでしょ!？」

「ええい、我を置いていくくらいなら運ぶくらいのことはいせいでいい」

「そんな無茶なことを…」

おそらく私の望みは…

だからそれまではこやつと、あ奴ら二人とゆっくり暮らしていくと
するか

穏やかな日常（後書き）

平和に暮らすマテリアルたち

その日常のタイムリミットは迫っていた

次回はセイ視点の第4話「決意の時」

決意の時（前書き）

投稿遅くなりました

この後の話の展開がちょっと2通りあってどちらにするか悩んでるんですよ。

なのはたちと協力するのか、なのはたちの敵になるのか

もしもどちらが読みたいという要望があれば感想に要望いただければと思います。

それでは4話をどうぞ

決意の時

それはシオンの何気ない一言に疑問を感じて始まったことだった

「最近よく変な制服の人を町とか森の近くで見かけるんだ」

「変な制服ですか？」

「うん。このあたりには見たことない青い制服に白のズボンだったんだけど」

まあ、それだけならば何の問題もない

何らかしらの会社が制服を新調した可能性だっただけでもない

「その人たちね、ここにも反応が…とか言ってたからさ。なにかいるのかなー？っておもってさ」

「！？…そう、ですか」

そのあとも私たちはシオンといつもどおり普通に会話を進めていく

かすかな不安を胸に抱いたまま…

そして食事が終わったあとシオンが片付けを行っている間私たちは一つの部屋に集まっていた

「先ほどの食事中の話なのですが…」

「青い制服の人間のことだな」

「ええ、私の取り越し苦労ならいいのですが…」

そう、私自身の取り越し苦労であればいいのだが、もしそうでない場合は

「僕たちのことがばれ始めてる。そういうことだね」

「ええ、おそらく隠してはいるものの戻ってきた私たちの力が漏れ始めているものと思われれます」

そう、私たちの力はもともと闇の書のマテリアルであるがゆえに高い
これは慢心や驕りなどではなく、ただの事実であると考えている
その力をどう使うかは私立ち次第なのだから

私たちの心境はとても重いものへとなってしまうている
そして今の現状を再確認として話す

「私たちのことがどうやら感づかれたようですね」

おそらくこれは覆すことのできない事実

「そうみたいだね。僕たちも十分に力は戻ったし今の生活もそろそろ潮時…かな？」

ライが悲しげに話しているがそれは私やヤミも同じはずです

「うむ…しかしあ奴に何も言わずに消えるのは…」

その通りだ

今の状態で一番の懸念事項といえばシオンのことだ

正直最初は利用するだけのつもりだったのだが私はそれだけではいられなくなってしまった

彼と一緒に暮らす…いや、彼や同じマテリアルである彼女たちと暮らすことが自然となってしまった

そしてその幸せから離れたなくなってしまうている

それだったら…考えられる手段など一つしかない

シオン相手だからこそ提案できること

「…ならすべて話してしまえばいいのです。もしかすると彼なら」

そう、すべてを話してしまえばいい

そうすればやさしい彼のことだ、気にしないでといい、いつもどおりに接してくれるだろう

思考にふけつているところにヤミから話しかけられた

「希望的観測で動くことするのか…理？」

そうだった

<セイ>とは呼ばずにマテリアルでの意味合いでもある<理>と私
のことを呼んだ

「私…が希望的観測？…感情で…」

私は<理>を司るマテリアルのはずだ

ゆえにライのように感情に任せて動くことはないはず

そう、そのはず…なのに…

「もしかしてセイ…今の生活を、シオンとの生活を続けたいの？」

どうなのだろう…いや、その答えなんてとっくに知っているのかもしれない

「…ええ。私はシオンやあなたたちと暮らすこの生活をとても気に入っています」

「…そっか」

「そして私は何をしてでもこの生活を続けたいと思っています。そ

う、何をしてでもです」

「なるほどな…」

私は二人を見ることができない

私が提案したはずなのだ、今の生活は一時しのぎのものであると

だから理としての役割を果たすなら私はここでこの生活をあきらめることを提案するべきなのだ

なのに感情に身を任せている自分を恥じることしかできなく、また二人に申し訳ない

そう思っていると私の視界に二つの手が入ってきた

「セイが思ってること、考えてること。実は僕も考えていたこととおんなじだもん」

「我はまあ…そのあれだ。私の役割は王だ。おまえたちと気持ちは同じくしている」

「あなたたち…ありがとうございます」

それから私たちはこれからのことを決めていくことにした

今一番考えて行かなければいけないこと

それはこの生活を守るためにどうするべきなのか

「私は…守るために私たちができることなど戦うことだけだと思います」

「それも…そうだよね」

「我らが力を合わせてもできてこの家の場所を…シオンを知られないようにすることぐらいだ」

それが今の懸念事項であった

いくら私たちが捕まらなくともいずれこの家のことは管理局に知られてしまうだろう

その時犠牲になるのはシオンだ

私たちをあぶりだすためにシオンを利用するかもしれない

その時に力がないシオンはどうすることもできない…

「とりあえず当分は管理局の連中が動くのを待つしかないんじゃない？」

「ほう、珍しいなそんな受身の選択肢を選ぶなどと」

「僕だって危険があるならぶつつぶしていきたい。けどそれじゃ僕たちはよくてもシオンによくない」

「…あなたも考えてはいるのですね。では私たちの当面の目標は決まりですね」

そう、こちらから手を出してシオンに被害が行ってしまったって意味がない

ならばこちらからは手を出さず隠れ切れればいい

幸い、闇の書の呪いなどがシオンにかかっているわけでもないから私たちが動かなければ何かが起こるといったこともないだろう

「みんなー、どー？」

どーやらシオンが私たちを探しているようです

ちょうどこれからのことについては話し終わっています

「シオン、どこにいるよー」

そう言って部屋から出てリビングに走っていくライ

ヤミもそれに続くように部屋から出ていく

「ルシフェリオン」

<どうされましたか、マスター？>

「私は…私たちの魔導でシオンを守ることはできるのでしょーっか？」

<らしくありませんねマスター>

「ルシフェリオン？」

らしくない？私が？

「あなたは以前言いました。」この身に力のある限り」と

それは私が確かに話したこと

私にとってはこれは誓い

砕けぬ闇を復活させるため闘っていた時の口癖にしていたこと

「今のあなたは力をだいぶ取り戻したはずです」

そう、これまでの期間は長いとはいえなっただけれど十分な時間はあった

「力があるのであればあなたは戦えるはずなのではないでしょうか？」

そうでしたね。まさかルシフェリオンにいわれるまで忘れていたなんて

私にはまだ力が、魔導の力がある

「私が今を守ります。ライとヤミとシオンを…我が魔導のすべてをかけて」

「セー？」

ルシフェリオンと話していたらいくらか時間も過ぎてしまっていた
ようでシオンが部屋まで呼びにきた

「どうかしましたか？」

「いま下でシュークリーム食べてるんだ。セイもおいでよ。」

「そうでしたか。では今行きます」

私は小さく笑みを浮かべる

今のままでいられるのなら闇を復活させなくてもいいのではないかと
さえ思えるのだから

「セイ、何かいいことでもあった？」

「そうですね。私はまだまだやれそうなのがわかりました」

「？まあいいや。ほら、下で一緒に食べよ」

「はい」

そう、私は戦う事が…まだ力を持っているのだから

来るのなら、敵であるのなら打ち砕く

それがたとえオリジナルが相手であろうと絶対に

私が今を守ると決めたのだから

決意の時（後書き）

平和が崩れるかもしれないとも危機感を覚えながら

マテリアル達は警戒しながらも平穏に暮らす

今回はライ視点で第5話「危機感と可能性」

危機感と可能性（前書き）

この話だけ妙に纏らなかった…
結局おかしいところがあるかもしれないですが気にしないで読んで
ください

危機感と可能性

「みんな最近なにかあった？」

そうシオンが僕たちに聞いてくるのはここ2、3日の間に始まった事だ

始めはただ「疲れたの？」とか体調の心配をしてたんだけど

流石に何日も何日も家に籠っていたら別の何かがあるのではないかと気づかれてしまったようだ

64

「いえ、ただ最近はずっと外で活動する事が多かったので家の中でゆっくりしようかと思ひまして」

「ふーん、そっか。確かに最近ずっと外に出かける事多かったね？」

「うむ、まあ少し気になることがあったからだ」

「へえ」

色々聞いてくるけどシオンは最後の深い部分までは聞いてこない

僕たちに遠慮したりしているのか、それとも本当に興味が無いのか…

「そつだ！ 皆が時間あるなら大掃除でもしようよ」

「大掃除？ この家掃除するの？」

「うん。ほら、いつも使ってる場所なんだし部屋くらい掃除しない
？」

「ええ〜！？ だって面倒だよ、やらなくたって生活できるって」

「だめだよ。ここで暮らしてるんだから多少は手伝ってもらおうよ」

「そつですね。少しくらいは返せる恩を探さなければなりませんし
ね」

まあセイのいってることもわかるけど…

掃除するのはやっぱり面倒だし…

「なによりおなかすいたよお〜」

「そつだね。取り敢えずお昼ごはん作ってくるよ」

「まあ、腹ごしらえする事も必要であろう」

そうして昼ごはんにする事になった

シオンが作ってくれるご飯はいつもおいしい

まあ、僕たちにこの食事が必要なのかどうかだけならいらないのだけれど

最初、人間は食べないと体力が回復しないからシオンが不自然に思わないようにと食べた

それがとてもおいしく感じて、幸せな気分になった

そこから食事は僕にとって大切な物になった

思えば大事な物が増えてきた気がする

シオンとの時間、シオンのご飯、そして、皆で遊ぶこと

どれにもシオンが関わってるのは仕方ないよね、この家はシオンの家なんだしね

それよりも何でシオンって一人で暮らしてるんだろう

何か事情があるんじゃないかってセイは言ってた

僕たちにも事情があるからシオンの事情だけ聞くわけにはいかないからって聞いてない

けど、いつかシオンのこともっと知れるときが来るのかな？

その時は…

「ライー？」

「うわぁ！？な、何シオン？」

「ご飯できたから呼んだんだけどなんか上の空だったから」

「そ、そっか」

危なかった…いつの間にか考えすぎて周りが気になってなかったよ

「まあ、いいや。ほら冷めちゃっ前に食べようよ」

「うん。じはんだ、じはん〜」

シオンのご飯はおいしい

まあそんなこと何度も言うみたいで変かもしれないけれどね

セイとヤミも食事の時は表情にはそんなに出さないけれど楽しそうにしている

そしてそんな食事が終わった後は

「じゃあ掃除やるつか」

「ええ〜？本当にやるんだ…」

「たまには良いじゃないですか。身体を動かすのは貴方の本領ですよ」

考えるより動く方が良いに決まってるけど掃除はやだよ…

というより何でセイはそんなに張り切れるんだよ

「私は貴方と違って整理されている状態の方が好ましく思っているものだから」

「ちょ、僕だつて」

「我らの部屋はそれなりに綺麗に使っているが一部屋汚い部屋を知つていてな」

「ま、まっつてそれつて」

セイだけじゃなくヤミまで話に乗ってきた

「ええ、私の隣の部屋です。どこか分かりますよね？」

「うう…はい」

「ついでに言うのであれば誰かがよくいる居間の一部分でもあるな」

「それだけじゃなくて裏庭の右の花壇の近くもだね」

「シオンまで!？」

二人がこうやって僕のことをからかうのは良くある事だけどシオンもだなんて…

「まあそれは冗談だからね。君たちは自分の部屋を掃除してくれれば後は別に良いよ」

「ですがそんなわけには…」

まあそうだよな

シオンへなにかちょっとでも恩返しが出来ればと思ってるのに自分の場所だけで良いなんていわれると

僕は面倒だしラッキーとか思ってたけどさすがにセイは口出したよ…

根気良く粘るセイにとつとつ根負けしたシオンは

「う〜ん…じゃあヤミの隣の部屋が物置状態になってるからその掃除頼んで良いかな？」

「わかりました。ではヤミ、ライの部屋の掃除にでも行きましようか」

「うぬ。家臣の部屋の管理も王の務めだ。我が直々に見てやるう」

「ってちょよ！？な、何しにいくのさ！？」

さすがにまずい…

別に何があるって訳じゃないけど…ね？

「い、いって二人とも、ほら自分の部屋をな」

「確かにそうですね。では自分の部屋が終わり次第貴女の部屋に行くことにしましょう」

「そうか…我自身の部屋も多少は掃除しなければならんな」

そうして二人は自分の部屋に向かってくれた

ちらりとシオンのほづを見ると食器を片付けていた

…シオンって何気に家事能力高いよね

それをじっと見ているとそれに気がついたのかシオンは笑顔でこっちを向いて

「ライ、やるっか?」

なんていつてきたのですぐに部屋へと向かった

「こ、こわかった…」

相変わらずあのシオンの笑顔は怖い

見た感じは普段と変わらない、うん僕も自分に向けられて無かったら気がつかない

けど直接あの笑顔を見ると何か違う、オーラというか威圧感を感じて従わざるを得ない

あの笑顔の前にはセイでさえもが怯えて何も出来なくなる

最初のころはヤミは何回か対抗しようとしてたけどあの笑顔を向けられ続けてついには勝てなかった

笑顔のまま無言で迫ってくるのって…怖いね

「この部屋片付けなかったらまた…なのかな」

実際シオンがその程度の事で怒ったりはしないんだろっけど、もしもと考えると怖い

「やるっ…」

いざ部屋を片付けようとして入り口の近くから落ちているものを片
っ端から拾い集めてみた

お菓子のごみ、飲みかけのジュースの入ったペットボトル、なくし
たと思っていたボールペン…

73

「また見事にコレだけの物を部屋の中にためたものだな」

「そうだね。僕自身もびっく…ってヤミ!?!?何でいるのね」

「お前一人に任せていて今日中に終わるわけが無いだろうっからな。
この我が手伝ってやろう」

「え?」

「何度も言わせるな。我が手伝ってやるのだからすぐに終わらせる
ぞ」

そついいヤミは部屋の中のをぐみとそつでない物へと分けていく
びっくりだ

なにがってヤミが、王であるはずのヤミが僕の部屋を掃除している
こと

そんなふうに驚いているとヤミがこちらを向き怒鳴ってきた

「この塵芥!!やる気が無いなら全部闇の中に返すぞ!!」

「うわああああ、やる、やる、やるって。だからちょっと待ってー」

結局怒鳴られながらも1時間後くらいには部屋は片付いた

「まったく…どうしてこつも汚せるものか…」

溜息をつきながらヤミは話す

やっぱり、そうだ

「ヤミ、やっぱり変わったよ」

「ん、何のことだ？」

「僕は、僕達は昔の、マテリアルとしての僕たちだったらやらないようなことをやってる」

砕けえぬ闇の復活を目的として行動していた時とは違う

それ以外にやったことも無いのになぜか懐かしくもなるような今の
日常

「こつむ…まあシオンがいるからではあるな」

その通りだ

あの時シオンがいなかったら僕達はそもそもここまで自由気ままに

過ごしていなかった

いや、すでに管理局と事を構えていてまたやられていたかもしれない
すべてはシオンがいたからなせた今

「…ねえヤミ。僕はひとつだけ思うんだ」

「…？珍しくしおらしくなりおって、どうした」

「僕たちとシオンって…本当に初対面なのかな」

「なにを言っている…長き時を封じられて過ごした我らが今の人間
と前に会ったことなどあるわけ無いだろう」

たしかにそうだ

けれど何かが違つと告げている気がする

シオンと、《御架月紫苑》とであった事があるわけは無いはずだ
だけどそうじゃない似た誰かにいつか出会っている気がする

「僕たちはずっと闇の書の中にいた…だから違つよね」

「うむ、まあ、あれだ。今が暮らしやすいからそう思いたいだけだ

るっ」

「そっか…うん。そうだよな。僕達は本来は闇の書、三基のマテリアル。それ以外の何でもないのだし」

まあ考えるのは良いや、セイに全部任せよう

僕が出来るのは《力》を振るう事だけ

自分の思うがまま、僕は飛ぶんだから

「ヤミ、僕はやるよ！！僕が戦える限り」

「…ふん、まあ勝手にやるが良い」

「そうさ僕の太刀にいつぺんの迷いも無いんだ。絶対に…」

絶対にずっと平和に皆と暮らしてやる

管理局や僕のオリジナルたちなんて関係ない

僕が、僕の意志で決めた事なんだから

危機感と可能性（後書き）

マテリアル達はこの先の事を決意した

そんなときに無慈悲にも平和な生活に終わりが告げられる

今回はヤミ視点の第6話「終わる日常 生まれる闇」

終わる日常 生まれる闇(前書き)

次回からが戦闘パートなども入れていきます

ちょっと長めですが一応日常編も終わりなので読んでいただければと思います。

終わる日常 生まれる闇

夕食後、皆がそろって居間でくつろいでいるとき

ふとシオンが話し出した

「今までは休んでたけど明日から新学年だし僕は学校行ってくるね」

「学校…ですか」

「うん。最近は君たちが来たばかりでいろいろあったから休んでたけど、

さすがに学年が変わってすぐも学校休むのはまずいからね」

シオンはそのように我らに告げた

学校というのはあれだな、勉学の間であるっ

まあシオンは魔力を持っているわけでもないし、そろそろ管理局にマ
ークされ

ることもないだろう

「シオン…いつちゃうの？」

「大丈夫だよライ。学校で特にすることもないし、終わったらすぐに
帰ってく

るよ」

日中にシオンがいないことに対して、つもなく落ち込み下を向いて
いるライ

をみてシオンはそう話す

それを聞いたライは顔を上げる。すごく笑みを浮かべた状態で

「ほんと！？ 絶対だから、絶対だよ！！」

「わかったよ。うん、すぐに家に帰ってくるよ」

やったーと喜びながらあやつは走って部屋に戻っていった

現在の時刻は9時

時間的にはねていておかしくない時間かもしれないが…

「あやつは子供か？」

「どちらかといえばそうでしょうね。われわれと違って動くことを重視して

いるので」

「その言葉だけ聞くと我らが全く動かないように聞こえるのだが？」

「いえ、そのような思惑はありませんよ。まあそう聞こえるというのであれ

ばあなたがそう思っているからかもしれない」

「くっ…言うようになったなセイ」

「やつがこのように言うようになったのも最近では多くなった

ライの自由奔放（言い換えれば唯の我俣）もよく見えるようになった

これだけ我らは変わることができた

「ええ、まあそう思うのでしたら何度でも言っただけで差し上げます」

「セイ…我に対する侮辱と受け取るがいいのだな」

そうして我はエルシニアクロイツを手に取りセイに向ける

「そちらがその気なら…望むところです」

そうしてセイもルシフェリオンを握る

そのままお互い魔法の打ち合いになるうとした瞬間背筋に急に寒気が走った

見ればセイも同じ状態でルシフェリオンを持つ手が微妙に震えている

「さて、二人とも。何をしてるのかな？」

頭の中で流れる警告がそちらを向くなと伝えてはいる

しかしシオンに声をかけられた以上見ないという選択はできず

「ししししおん！？ど、どうした？」

「何、してるのかな？」

何とか出した声に帰ってくるのは笑顔で問い返すシオン

あの笑顔は怖い

そう、あれは我らを作った人物が起こったときのよう…に…？

我らを作った…？

そういえばなぜ我らは作られたという明確な確証を持って動ける？

「ミ、て？ …、無 …でー」

我らは…

「ヤミ…！」

「し、シオンか。何か…」

そこまで言いかけて気がついた

我はシオンに問いかけられている最中に考えていた

よってその間のシオンの話を無視していたことになり

「やっと気がついてくれた？　じゃあ『お話』聞かせてもらおうか」

その後約1時間ほどにわたってシオンに散々説教された

次の日、シオンは早い時間に家を出て行った

なんでもここから学校まではだいぶ距離があるようだ

「じゃあヤミ、家の事はよろしくね」

「うむ、お前は気にせず勉強に励むがいい」

「そうだね、じゃあいつてくるね」

「しおん、いつてらっしゃーい」

リビングからライが返事をしてそれを聞きながら紫苑は家を出て行った

シオンを見送った後は特にいつもと変わらない

特に変わるはずも無い…はずなのだが

「昨日の夜から浮かない顔をしていますね」

「セイ…か」

「何か心配なことでもあるのですか？」

心配事

そう聞かれたところで具体的にどうとどうということとは無い

すべては我自身の想像でこやつらにまで聞かせる必要は…

「ヤミ、私たち…いえ私はシオンを、あなたたちを、この今という
時間を守

りたいと思っています」

「…」

「何か心配なことがあるのでしょうか。なら私が力になります」

「セイ…」

「私のこの身に力のある限りと決めたのですから」

こやつがこつまで今にいることを望むとは…

「やみー、もしかして僕のことを忘れてないー？」

「お前も…か？」

「僕だってマテリアルとして闇を復活させることよりセイとヤミと、何より」

シオンがいる今の時間が続くほうがうれしいんだよ」

我だけでなくこやつらも今を望んでいる

なら我の考えを聞いてもらうほうが良いかも知れん

こやつらにもしかしたら似たような知識などがあるかも知れないのだから

「今から話すことは所詮我の戯言と聞き流してくれて構わん」

私の考え 今の生活のこと

一度消されたはずの我が闇の書のマテリアルとして弱体化したとはいえず

き延びていること

そしてその後の力の回復速度が当初の予定よりも早いということ
最後にもうひとつ…これが一番の懸念事項なのだが

「この家のどこかに闇の書と同じ力を持った何かが存在している」

「やはり…そうですね」

「ふーん、やっぱり二人も気にしてたのか」

この反応からして私の感じていたことは間違いではなかったか…

このことに関しては外れていてほしかったのだが

「どこにあるか、それは我にはわからないのだが…セイ？」

「いえ、私にもわかりません。ただ、反応が現れたり消えたりしているのが

気になります」

「それも一定の時間ってわけじゃないしね。いる時間より消えてる時間のほ

うが多いしね」

こやつらも案外平和にそうに暮らしていたわりには警戒するところ
はっか

りとしているようだ

だがそれでも見つけることはできそうに無いか…

「では、それが管理局に見つかる心配はなさそうだな」

「ええ。家の中ですら微弱な反応しか示さないのですから、管理局
の方では

何もきっかけがなければ見つかる心配はないでしょうね」

我らが見つけられなくとも、管理局の人間も見つけられないのなら
なんの問

題もない

そう、そのはずだ…

夕刻となりそろそろシオンも帰ってくるか？

「ねー、せーいー。シオンまーだー？」

「学校とは決められた時刻にしか終わらないのですから仕方ないでしょう」

そろそろ帰ってきてもらわねばあやつがづるさすぎてかなわんのだが…

「ねー、せーいー」

「ええいうるさい奴め。そんなに気になるのなら家の前にでもたつて待って

いればよかるうー!」

いい加減に我慢の限界にも達してきたのでとりあえず家の外に追いつ出すこと

に決め、そう言い放つ

ライ自身は厄介払いされたという事実には気がつかず嬉々として玄関に向か

っていった

ドタドタと音を立てながら走っていくさまを見て我慢がきかないのかと呆れ

る

反面、自分も早く帰ってきて欲しいと考えていることに少し気がついた

その時だった

魔力反応があり、あたりの色が突然変わった

「結界か!？」

「そのようですね…しかもこの結界は私たちと同じベルカの…」

そう話しているとライが騎士甲冑を展開した状態で部屋に戻ってきた

「ヤミ、セイ、外に魔道師が…あいつらがいる」

そう言われなくてもわかる

この反応は…闇の書、いや今は夜天の魔導書、のもの

「とうとう奴らに見つかってしまった…か」

そう気を落としているとセイも立ち上がりルシフェリオンを構える

それをみて我もエルシニアクロイツと甲冑を展開する

「我らはこんなところでやられる事はできん。わかっているな」

「もちろんです。すべてを守るのですから」

「シオンが帰ってくるまでに片付けなきゃね」

相変わらずな二人というわけか…

だがそれに感謝したい

「行くぞふたりとも…なんとしても奴らを蹴散らす」

「ええ」

「うん。いっくぞー」

我らが初めて持つことのできた我らの願いなのだ

必ず果たさせてもらっぞ…必ず

終わる日常 生まれる闇（後書き）

マテリアルたちが見つかったその日

管理局は一体どうやって彼女たちを見つけたのか

今回は初の管理局、リインフォース視点の第7話「主と仲間と共に」

主と仲間と共に（前書き）

予定ではバトルパートのつもりだったのに…

リインフォースは今回の戦闘に参加しないのでバトルパートには入
れませんでした…

けど次回は多分入れる…はずです

主と仲間と共に

私たちの永かった旅はようやく終わった

心優しき、最後の夜天の主の下で

「リインフォース、学校行ってくるな」

「ええ、行ってらっしゃい」

ひと通り終わったあとにも残滓による事件はあったものの早期解決でき、今ではなんの問題もなく暮らしている

だがあの事件で私の寿命とも言えるものは多少短くなったのだろう
良くて次の夏までもつのかどうか、というところだろう

「リインフォース、今いいか？」

「将か。何かあったか？」

「いや、何かと聞かれるとどう答えていいものかわからないのだが」

将の歯切れが悪い…なにか問題でも起こったのだろうか

「このあたりをアースラがサーチしていたときに時々だが古代ベルカ式の結界が張られているのを発見したらしい」

「それは…」

「ああ、我らが知らない魔道師や騎士であるならそれで終わっても構わないが万が一のことを考えて」

「そうか。すまないが私の方にはなんの異常もない」

前のようにまた残滓が現れているのだろうか

あの時でさえ結界などの異常が見つかるまで私の方でも気がつかなかった

だとすれば…

「私の方で調べてみよう」

「そうか。だが」

「分かっている。主を困らせるようなことは決してしないさ」

以前の闇の残滓の事件の時にそれは決意した

私の時間はもう短い…それもあの時でさらに短くなってしまっている

だからもうこれ以上何かあってはいけない

大事になる前になんとか原因を突き止めておこう

そうすれば管理局の方が、でなくとも将たちが動いてくれる

今は私が動かなくともみんなが私たちの力となってくれる

「さて…まずは近所からだな」

そうして私は家を出て調査を始めることにした

「結界が張られたいたらしいが…それらしきものは見つからないな」

あの日から数日

毎日少しずつ時間をずらしながら街を探索しているが、結界を感知することはできなかった

アースラにも協力を依頼したがあちらもなかなか感知できないようだ
ときどき一瞬だけ計器が反応するらしいが、誤認の可能性が高いよ
うだ

「反応自体がそうであってほしい。もう主を悲しませたくはないし
な」

反応が誤認であれば主たちに伝える必要も特に無く、安心してまた

過ごすことができる

そうであればどれほど良いことだろうか

「…まだ、時間は残っている」

そう思いながらぼんやりと街を歩いて行く

広場について休憩がてらベンチに座り街を見渡す

「ここは…本当に平和なところだな」

街には人が行き交い笑い声なども聞こえる

家族や恋人たちと普通に過ごせる時間

そんな時間に短いながらも共に生きることを許された…

ふと気がつくところちらをじっと見ている少年がいた

どこにでもいそうな平凡な少年

こちらが見ていることに気がつく少年はどこかへと消えてしまった

「何かあったか…いや、この容姿が珍しかっただけか」

他の意図があったにしろ少年が何かするとも思えなかった

そうして私は家へと戻った

事態が変わったのは季節も変わり主が進級したときのこと

それまでも結局怪しげな結果などは発見することはできず、アースラでも誤認であろうとの結論をつけた頃

少し、ほんの少しだけ妙な胸騒ぎがして主に連絡をとった

「リインフォース、珍しいな。どないしたん？」

「主はやて…その、今は学校の教室ですか？」

「そうやね。それがどうかしたん？」

「そこで魔力反応を探ってはもらえませんか？少し気になることが……」

「わかった。ちょっとまっててな」

これが私の思い違いならなんの問題もない

だがこの感覚はあの時感じた……

「……特に何も無いと思うけど、一応何かあったらまた連絡するわ」

「はい、わかりました。ではまた」

思い過ぎし……そうであってくれ……

だが、結果私の願いは砕かれてしまったようだ

「リインフォース！！緊急事態や」

「主はやて、どうなされたのですか!？」

「さっき本当に少しの間やったんやけどある魔力反応があった」

「それで」

それが特定のロストログニアであつてもいい

あれの反応でなければ…

「…認めたくないけど闇の書と同じ反応が出た」

「…そう、ですか」

「それで管理局の魔道師が反応があつた人物の家を調査することになった」

「わかりました。他のみんなには？」

「アースラから連絡が入つとるはずや。リインフォースは家で待機や」

「…わかりました。主はやて、よろしくお願いします」

私には今は見ていることしかできない

闇の書関連だったとして何が目的なのか、また私に何が出来るのか
それを考えながら今は見守るとしよう

我らがや天の主とその騎士、そして小さな勇者たちを

主と仲間と共に（後書き）

管理局は闇を見つけた

マテリアルたちはどう今を守るのか

戦闘の最中現れるのは…

今回ははやて視点の第8話「目覚めし最強の王」

目覚めし最強の王（前書き）

初の同日投稿となります

というものの当初の予定ではここまでで一話のつもりだったので
変なところもあるような気がしてもそこはスルーしてくださいと…
あと、感想貰えたら嬉しいです。

目覚めし最強の王

闇の書の反応があつた人物

御架月紫苑

の家

そこを包囲し、結界を張つた

「これで向こうは何がいようと逃げられへん」

「ええ、私とはやてちゃんの二人でかけた結界はそう簡単には破られないわ」

そうしてこちらが体制を整えたときに知つた…知りすぎた顔が三つこちらに向かつてきた

「やっぱり、復活してたの」

「ええ、私たちはまだやるべきことが残っていますから」

それぞれが同じ顔と対面することとなり

「君たちは…どうして」

「君になんかわかるものか！！僕は、僕たちはっ」

それぞれが自分と同じ力と以前とは違う覚悟と戦うこととなる

「一体何が目的や」

「子鳥にわざわざ話すことなど何も無い…我らが勝たせてもらっぞ」

私たち三人が抑えている間にあの家を調べれば…

そう考えていたのがばれていたのかもともそのつもりだったのか
しれないが

「まずは邪魔をされないようにしなければなりません…ラ
イ！」

「わかってるよセイ」

そうしてライと呼ばれたマテリアルが右手に持った黒い玉を空に放
り投げる

「なのはちゃん…！」

「うん…！」

なのはちゃんに声をかけると意図を理解してくれたようでシューターを飛ばして黒い玉にぶつけた

「やった!？」

「かかりました。今ですヤミ」

「これを!！」

そうしてヤミというマテリアルが白い玉を黒い玉に向かって投げた

「いかん、フェイトちゃ」もう遅いです!！イミテーション」…なんやて!？」

そうして白と黒の玉がぶつかり合いそこにセイが魔法を打ち込んだ
するとあたり一面が光で覆われる

「い、いったい何なんや」

「わからない…みんな警戒するんだ」

クロノクンの言葉にみんなが目をつぶりながらも武器を構えていつでも対応できるようにしている

そうして光が晴れたときにそこにはたくさん「私たち」がいた

「な、なんやこれは」

「イミテーション…まあ、劣化複写人形、ただの模造品とでもいえばいいでしょうか」

「模造品…これだけの数のものを一体どうやって…」

私たちの周りにはおよそ50人ほどはいるのだろうか

私たちの人数は私と守護騎士、なのはちゃんとフェイトちゃんにクロノくん

これだけの数を相手にしなければいけないのだろうか

そう思っているとその模造品、イミテーションが動き出し私となのはちゃん、フェイトちゃんに意外に攻撃を始めた

「クロノくん、みんな!!」

なのはちゃんが助けに行こうと動こうとしたら魔力弾が飛んでくる

「あなたのお相手は、私です」

「仕方ないか。じゃあ早く倒してみんなの援護に行くよ、レイジングハート」

《了解です。マスター》

なのはちゃんだけでなく私のところにはヤミがフェイトちゃんのところにはライが

それぞれ自分と同じ格好をしたマテリアルたちと戦うことになった

自分と同じようなバトルスタイルどころか基本的には同じなため比較的やりにくい

ほとんど決定打は与えられない、代わりにこちらも決定打はもらわないのだが

とにかく闘いながら説得はする

話し合いを忘れたら人間終わりや

「なんで、なんで戦うん！」

「貴様らが仕掛けたものだろうが！！我らは…我は…」

そうしてその場に静止する

一応何があってもいいように構えてはおいている

「貴様らさえ何もしてこなければ…この時間は終わらないというのに…！」

「くっ…なら、話してみい」

「子鳥に話すことなどない！！我らに関わるな…それで十分だというのに…！」

取り付く島もない

なのはちゃんとフェイトちゃんもおんなじ感じのようで

「お話し、聞かせてってばー!」

「あなたに話すことは、ありません」

「いい加減に倒れるよ!ー!僕にはやらなきゃいけないことがあるんだから」

「それを話してよ。協力、できるかもしれないでしょ!ー!」

「おまえたちなんかじゃ絶対にできないことだよ!ー!」

あの二人もこのマテリアル同様に私たちに話をしようとはしてくれない

どうすればいいのだろうか…

その時クロノくんが動いた

「はやて!僕が相手をするから君は家の調査の方を」

「了解や。いくで」

シグナム達がイミテーションを減らしたおかげでクロノくんがこちらに加勢することができるようになったようだ

そのクロノくんがマテリアルの一体を相手してくれれば私はあの家の調査に向かえる

「ちい、やらせるかつ…アロンド「ステインガーレイ！」くっ」

私似のマテリアルが攻撃してきてもクロノくんが妨害してくれる

そのことに安心しながら家の中へと向かっていった

家の中に入ってみるが特に変わったものも何も無い

しいて言えばこの場所全体に何らかしらの結界のようなものがあったということだろうか

「…ここはただ居場所として使っていただけなんか？」

「そうだね。彼女たちは自分たちの力がもどるまでの宿として使ってたね」

「っ！？誰や」

家の中には特に魔力反応も感じられなかったからだれもないものと思っていたため返事が帰ってきて驚いた

また驚いたのはその声の主が普通に現れたことだ

「人の家に無断で入ってきてるのは君だよ？名乗るならそつちからしたらどうかね」

「…それもそうやな。管理局囑託魔道師、八神はやて。これでええか？」

「そうだね。僕は御架月紫苑。それでなんの用かな？」

「わかつとるんちゃうんか？彼女たちを止めるために此処に来たんやけど」

そう言うと軽く笑いながら話しかけてくる

正直何を考えているかわからない以上こちらにも気を抜くことはできない

「そつか。じゃあみんな帰ってよ。そうすれば彼女たちも止まるんじゃないかな？」

「それはできん。彼女たちには償うべき罪がある」

「そつか…じゃあ仕方ないか…」

私がそういえば彼は少し考えこんだあとそう言い、目を閉じ俯く

何かをするのかと思いき警戒していたら急に魔力反応が出た

驚いて紫苑を見ていると彼の髪が伸び、色が黒から銀色へと変化していく

身体も成人男性ほどになりまるでユニゾンの症状のように

そしてこちらに顔を向け開いた目は真っ赤な瞳でその姿はまるで彼女のように

「リイン…フォース？」

「…まったく。普段からこっちじゃないと強気にもなれねえのかよこいつは…」

違う…リインフォースではない

ならなんだ…先程までの紫苑というわけでもなさそうなの彼は

そう思い杖と本を構える

すると彼は急に怒りを顕にし魔力弾を私にはなってきた

とっさに防御できたが威力が強く勢いで後ろに押されてしまった

「っ、なに、するん」

「なぜ…貴様がそれを持っている」

「それ…ってなんや？」

「決まっている。夜天の魔導書の事に決まっているだろう。それは俺のものだ」

「これは私のものや。みんなと、シグナム達やリインフォースとの絆の本や！」

これは彼のものではない

そう思いそのことを告げると彼は騎士甲冑を展開し歩み寄ってくる
甲冑もリインフォースのようなもので、見た目だけなら男版のリイ
ンフォースであろう

そんなことを考えていたら

「寝てる」

「ぐっつ」

お腹のあたりに強烈な痛みと共に私は気を失ってしまった

最後に見たのは悲しそうな顔をしながら夜天の魔導書を見ていた彼の姿だった

目覚めし最強の王（後書き）

現れたるはマテリアルの王

彼は一体なんなのか、そして紫苑は一体どうなったのか

次回は紫苑視点の第9話「マテリアルとの日常・裏」

マテリアルとの日常・裏（前書き）

今までで一番長いですね。

このあたりからこの話の核心に近づきます。

それと紫苑についてもこの話から、ですね。

感想くださった方々ありがとうございました。

思ったことを書いてくださるとそれが活力源になるのでこれからもよろしく願います。

マテリアルとの日常・裏

その日常は唐突に訪れた

僕は何も知らない 何も覚えていない

僕が覚えている限り最初の記憶はこの場所にいるところから

そしてただあるのは此処に僕がいるという事実のみ

そしてもう一つだけ確かなことは

僕の中にもうひとり誰かがいるということだけ

「ねえ、僕はなんなのかな？」

《さあな。俺が教えてやれることじゃない》

「なんで君は僕の中にいるの？」

《そんなこと今のお前が知る必要はない》

いつもこの繰り返し

僕の中の誰かはいつも何も教えてくれない

唯一教えてくれたことは名前だけ

その名前だっってほんとうの名前なのか知ることとはできない

「ねえユエ、君はいつまで僕の中にいるの」

《そのうち分かるさ。俺の意味が。そしてお前の…》

「????」

《今はわからなくてもいい。どうせ嫌でもいつかわかることだから》

この話はもう何度したことだろうか

そして僕は今日も学校に行く

なんで何も覚えていないのにそこには行くことするのかわからない
実際、なんで？と問いかけていると答えの帰ってくるものなんて一
つだってない

なんで僕はひとりで暮らしているの？

親は？家族は？

今住んでるこの家は一体なんなの？

これらすべて…まだまだあるかもしれないけれど一つとして答えは
でない

ユエと話しながらわからないことを考える

コレが僕の日常であり、全てだった

そう、彼女たちと出会ってユエが全てを話してくれたあの時までの日常だった

彼女たち、セイ、ライ、ヤミの三人と出会ったのは偶然じゃない

あの場にいることをユエが教えてくれて僕はその場に向かっただけ
そしてユエに言われるがままに歩いて行くとそこに彼女たちがいて

こちらに気がついた

「誰ですか!!」

「えっと…君たちのほうが気になるんだけど？」

杖を持った娘が僕にそれを向けながら問いかけてきたので僕は普通
であろう反応を返した

事前知識があつたからこそ彼女たちを見て何も驚きもしなかつたし
特に聞かなかつた

「なぜ…ですか？」

「ん？」

「なぜ、あなたはここまで拒否されながら私たちに食い下がるので
す？」

拒絶…か

たしかに自分を拒絶されるのは辛いね

でも僕はもっと辛い人を知っている

何も知らない僕が唯一知ってる夢のなかの人物

あの人は周りの人に請われ色々とやっていた

それが最後に自分の崩壊を招いた

あれを知っているからこの程度のことなんて僕は全く気にならない
少しも傷つかないかと聞かれたら嘘になってしまっけれど

「拒絶されることはなれてるからかな。僕は善意の押しつけが得意だし」

「なれてるの？」

「うぬのような年でそこまで悟っている子供も珍しいな」

「あはは、そうかも」

そう、夢の中では傷ついてる人は僕のことだ

夢だからその主人公が僕になっているのかそれともそれが僕の失われた記憶なのかはわからない

でも彼の思いは僕はそのまま知っている

だから彼女たちが今やった程度の拒絶なんてとても軽い物

そうして彼女たちは僕の家に来ることになり

「そういえば、名前を聞いてなかったけど教えてくれる？」

「…そうですね。名前くらいは必要ですね。私は星光の殲滅者」

「僕は雷刃の襲撃者だ！かっこいいだろう！！」

「我は閻統べし王だ。我の名を知ることができたことを誇りに思う
がいい」

「そっか、僕は御架月紫苑。よろしくね」

僕たちは名前を教えあうことよって初めてお互いを知った

このときは全然ダメだったかもしれないけれどこれからがある

そうして僕と彼女たちは新しい日常を始めることができたんだ

あれから3ヶ月が過ぎ僕も休んでいた学校に通うようになった

その放課後、中庭の人がぜんぜんいないところで僕は寝転がりながらユエに話す

「ねえ、ユエ。いつまで君はそうしてるの？」

ユエは彼女たちと出会った日からほんの少しだけしか表に出てこない

ユエが表に出てきて僕に話していると魔力反応が出るから出たくな

いという

そのためあれ以来ユエと話している時間はほんとうに少ない

「僕は君のおかげで普通に過ごしてきた」

どんな言葉をかけてもユエはなかなか反応しない

「そして彼女たちに出会って普通の日常を送れるようになってとても今が嬉しいし楽しい」

ユエがどんな目的で僕の中にいて、なんで彼女たちのことを教えてくれたのか

そしてなによりもユエが僕の何を知っているかなんてどうでもいい

「だからユエも一緒に暮らそうよ。表に出てきてさ」

彼女たちならユエだって受け入れてくれる

最初は僕のことですえ警戒していて果てにはこの場所も色々調べまわってた

それでも今はいろんなコトと一緒にやって仲良くなることができた

記憶とかもないからわかんないけど、きっと家族って「うーいづモ」
なんだと思う

「ねえ、ユエは何を怖がっているの？」

《っ！！》

「もうすぐ一年になるんだっけ？ユエのこと、だいぶ分かってきて
るって」

そういえば最初の記憶は夏ごろだったっけ

あれからもうすぐ一年も立つんだもんなあ…はいね

「だからさなんでもいいんだって話してくれれば僕は聞くよ。君の
ことを拒絶なんて絶対にしない」

《…どんなことだったとしてもか？》

久しぶりに出てきてくれた

「そうだね。僕に出来る事なんてほんとうに少ない。それでも君を
受け入れることくらいはできるよ」

《そうか…お前はそこまで強くなれるのか》

ユエは考え込みながらもすこしづつ何かを話そうとしてくれている
そして考えなどがまとまったのか少しづつ話してくれた

ユエ自身のことに取り組み、彼女たちのこと、そして…僕のこと

「…そっかだから君は、僕と共にいたんだね」

《そしてどうする。お前は……この反応は!?!》

「どづしたの?」

急にユエが黙りこんでしまった

何かを探っているようだけど…

《急いで家に帰れ!彼女たちが危ない!》

「彼女たちが…?まさか最近様子がおかしかったのって」

《おそらく気にしていたのだろう…だが何らかしらの影響で気がつかれてしまい》

「今、襲撃を受けている…」

そこまで結論が出た瞬間僕は走りだした

もともと身体能力の高い僕だ、家までの全力疾走ならなんとでもなる

そして家の近くまで来たときに家のある場所に透明のドーム状の何かがあるのが見えた

「ユエー！」

《ちい、どこの誰だかしらないが人様の家に結界を貼りやがったな》
「どうすればいい？」

《仕方ない、あいつらは踏ん張ってることを期待してまずは家の中に入り込んだ魔導師を叩くぞ》

「うん、わかった。でも」

でも最初にやらなければならないことがある

話さなければ何も解決できない

「まずは少しだけ話しをしたいんだ。戦うのはそれからでもできる」

《…お人好しだな。まあ俺でもそうするがな》

「じゃあ、いくよユエ」

《ああ、いつでも開放できるようにはしておいてやるよ》

「ありがとう」

そうして僕は家の中へと入っていった

家の中には彼女たちではない誰かがいた

「…ここはただ居場所として使っただけなんか？」

「そうだね。彼女たちは自分たちの力がもどるまでの宿として使ってたね」

「っ！？誰や」

完全に誰もいないと思っていたのだろう

もしくは反応がつかめなくて気がついていなかったのかもしれない
が僕が来たことに相当驚いていた

「人の家に無断で入ってきてるのは君だよ？名乗るならそっちから
したらどうか」

「…それもそうやな。管理局囑託魔道師、八神はやて。これでええ
か？」

「そうだね。僕は御架月紫苑。それでなんの用かな？」

「わかつとるんちゃうんか？彼女たちを止めるために此処に来たん
やけど」

そんなのわかってるよ

彼女が付いてる役職の名前からして傲慢な警察のようなものだった
ことくらい

だから彼女たちのことなんて罪が有るか無いかでしか見てないんだ

「そっか。じゃあみんな帰ってよ。そうすれば彼女たちも止まるんじゃないかな？」

「それはできん。彼女たちには償うべき罪がある」

「そっか…じゃあ仕方ないか…」

そう、僕はもう迷う必要はなくなった

本当の僕を取り戻すことを

彼女たちに仇なす者たち攻撃を加えることを

《お前はまだよくわかってねえんだろ。まずは俺に全部任せな》

そうだね、まだちょっと抵抗があるしさ

じゃあ、いごうか

そうして僕は変わる

ユエに身を任せ彼女たちに仇なす者を倒す存在へと

「リイン…フォース？」

「…まったく。普段からこっちじゃないと強気にもなれねえのかよこいつは…」

そうして戦闘態勢に入り意識を体を、全てを共有させたことであろう気がついた

あの少女が持っている杖と本がなんなのか

それに気がついたとき怒りからとっさに魔力弾を少女に向かって放った

少女はうまく防御してしまっただため不意を付いた割には決定打にはできなかった

「っ、なに、するん」

「なぜ…貴様がそれを持っている」

「それ…ってなんや？」

「決まっている。夜天の魔導書の事に決まっているだろう。それは俺のものだ」

「これは私のものや。みんなと、シグナム達やリインフォースとの絆の本や！」

ユエが何を言っているかよくわからないがおそらくとても大事なもののことなんだろう

だからこそ最初にやるべきことは決まった

まずはこの少女を黙らせる

「寝てる」

「ぐぐっ」

少女の腹に強烈な一撃を入れる

うめき声をあげながら倒れていく

そして夜天の魔導書を調べる

そして気がついたことがある

これは夜天の魔導書だけどユエが話してくれた夜天の魔導書ではない意識を共有していることで、すべてを話してもらった後だからこそそれがわかる

《ユエ、とりあえずは彼女たちを》

「ああ、みんなを助けに行くぞ」

そうして僕たちは向かう

彼女たちがいるこの戦場へと

マテリアルとの日常・裏（後書き）

さあ、王は動き出した

これから全てを変える、その一歩を歩み始めた

今回はユエ視点での第10話「始まりの戦い」

始まりの戦い（前書き）

お久しぶりです。

この一ヶ月学校が始まって全然執筆できませんでした。

今回はバトルパートということもあつたので遅くなりましたが

次回以降はなるべく早く掻き上げられるよう頑張りますので気長に呼んでいただけたらと思います。

ではバトル部分だいが変かもしれませんがどうぞ

始まりの戦い

「さてと…あいつらには借りを返してやらねえとなあ」

俺がもう一度ここに戻ってこれたのはあの三人が紫苑と一緒にいたからだ

そしていまそれが壊されようとしている

だったら俺の取るべき手段はひとつしかない

《僕達の障害になるものは全て消し去る》

「ああ、そうさ。破壊する。ただ、それだけだ」

《じゃあ、いこうか》

「みせてやるうぜえ、俺とお前の力を…原初の夜天の戦い方って奴をなあ！…」

そうして俺は翼を広げる

それは6つの漆黒の翼

「さあ羽ばたけえ！スレイプニール」

《この夜空を僕らで埋め尽くせ!》

俺は家に侵入してきていたガキを捕まえて飛んでいく

目指す場所は彼女たちがいる場所と管理局のガキどもの間

互いの攻撃をすべて無力化しガキに向かって持ってたものを投げる

「はやてちゃん!？」

気絶しているそれを白い奴が助けに行つた

黒い少年が杖をこちらに向け警戒しながら問いかける

「君は誰だ、それにその姿…はやてにいったい何をした」

「ああ？人んちに勝手に入った奴だぞ。腹一発殴るのぐらいは正当防衛じゃねえのか？」

「君の…そうか、君が御架月紫苑か」

「ん、ああ。まあそれも間違いじゃねえけど今の俺は違うんだわ」

「なに…?」

そうなんだよ

今は俺が表に出ている状態

それは御架月紫苑ではなく最強であり原初の名前

「俺はユエ…お前たちが届かない高みにいるもの。ユエ・アルハザードだ!!」

「ユエ…アルハザードだつて!？」

「アルハザードってまさか」

そういえばこいつらからしたらアルハザードってのは滅んだ旧文明の世界なんだっけか？

ただの名前がそこまで大層なものになるなんて考えもしなかったんだがなあ

《まあ、君ひとりだけで色々作ってたって言われても説得力の欠片もないしね》

(ひどい事言うなあお前…まあ、俺は戦ってるほうが楽しなあ)

《だったら戦いなよ。君の心が望むにね》

(もちろんだとも。俺は、俺のことは俺が決める。ってなわけで行かせてもらうぞ)

「まあ、あんたたちが知ってるようなアルハザードの原型ってのは俺ことだ…さて、俺に勝てるかな？」

言いながら黒い少年に回りこむ

反応さえ出来ていない少年を俺はあっさりと吹き飛ばす

「ぐっ、なに、が？」

「ああ、気が付きもしねえのか。だったら寝てな」

「がはっ」

追撃に適当に魔力弾をブチ込む

あまり魔力はこもっていないがあれはシオンと考えた 特別性 だ

あれを5発も6発も食らったらまず魔力使っては動けないだろうなあ

「さて、残りはどいつだ？」

「私が相手になるっ」

そう言いながら切りかかってくる烈火の将

その剣さばきはたしかに見事なもので、同等か、それ以下の相手なら初見ではまずさばききれないだろう

だが、俺はこいつより実力が下だということもなければ、成長しているとはいえ初見の剣閃でもない

上、左、右下

それらすべてを紙一重でよける

「ふう、あぶねえあぶねえ」

「よく言うな。すべてわざわざ紙一重でよけている人間の言葉だとは思えんな」

「あれ？気がついてたんだ」

「私をそれほど侮っていたのか…それとも」

「別に侮ったりしてゐるわけじゃないさ」

そう、そんなことはしなくたっていい

ここまでの太刀筋でわかった

あの頃からこいつの太刀筋はほとんど変わっていない

だったら俺が全力を出さなくたってどうということはない

「予測範囲内にある程度のお前じゃ俺を超えられねえよ。はあ、もいいよ守護騎士全員でかかってこいよ」

「ほう、それは我らを侮辱していると取っていいんだな？」

「クク、そう聞こえなかったか？ 俺の予測範囲内にいるお前たちだったら全員相手したところで支障はないって言ったんだよ」

「デメエー！」

鉄槌の騎士がデバイスを振りかぶって殴りかかってくる

だがその騎士の行動くらいだって

「残念だな。予測範囲内だ」

「何っ!?!」

俺は左手でデバイスを止める

いや、正確には手の前に小さな障壁を張って衝撃を完全に殺す

「どけヴィータ!!」

「我らが!!」

そうして向かってきた二人は右から剣を振りおろし左から拳を突き出してくる、が

「だからいったろ、予測範囲内だってなあ!!」

この程度の攻撃ならあいつがいたほうが強いさ

前は町で見たことがある気がするけどあれは本当にあいつなのかはわからなかった

ま、夜天の概念が崩れた今あいつはそうそう戦えやしないのだから
けどなあ

何度も何度も攻撃を捌き続ける

正直そろそろ飽きてきたところだが…

《そろそろいいんじゃないかな?》

(ああ?)

《あっちも僕らとの実力の差はわかったただろうし見逃してもらえりよう話してみようよ》

(ダメだったらどうすんだよ?)

《決まってるじゃん。そうせざるを得ない状態にすればいい》

(なるほどな。さすが紫苑だな)

《じゃあ、始めようか。僕らの全力魔法》

そうして空を上げる

今までいた場所よりも、守護騎士や管理局の魔導師たちよりも上にそして追いかけてこようとしたそれら全員を結界の中に閉じ込める

「そいつは特別性だ。内側からじゃ破壊できねえよ」

外から攻撃を当てるための、最大魔法を放つための時間稼ぎの牢獄

「というわけでここいらで交渉しようじゃないか」

「交渉だと？」

「ああ、俺は別にお前たちを倒したいわけじゃない。俺と彼女たちが静かに暮らせればそれでいい」

「だから、見逃せ・・・と？」

「察しがいいじゃねえか。聡い子は好きだぜ」

わかってるならちよつどいい

脅迫にしかなんねいだろつけどコレは俺達が今後のことも考えた上で
の結果だからな

黒服のガキはその言葉を何度か呟き考えている

おそらく俺たちをこのままどうするかを決めているのだろう

だがまあ…この話には乗らねえだろうなあ

「悪いが…その話には乗れない」

「やっぱりか…まあ自称正義の味方たちとしてはいい選択だと思う
ぜ」

そうなんだよなあ

別に悪い選択だとは思わねえんだ

ただ相手が俺だったことと、すでに結界の中に閉じ込められていることが問題だっただけで

「素直に俺たちを見逃す俺の最大魔法でポロポロにされてから俺たちを逃がすか。選択肢は二つに一つだ」

「僕らの答えはいったはずだ。僕たちは君たちのような犯罪者の言う事を聞く理由はない」

犯罪者…ねえ

その犯罪者がいなきゃ今のお前たちの力はなかったというのにそれでも俺を否定するか？

まあ、いいさ

すでに交渉は決裂…逃げるためには奴らを潰すしかない
だったら

(おい、セイ、ライ、ヤミ。お前たちはこの指定のポイントへの転送準備をしておけ)

(…あなたは一体)

(転送先で全部話してやるよ。俺のこと、そして紫苑のこともちやんな)

(絶対だからね！ヤミ！)

(任せておけ。追跡されんようしっかりしておけよセイ)

(任せてください)

さあ、舞台は整った

ここから逃げる手段も整えた

だからここでのこの戦いは終わりにさせよう

「とりあえずは…さようならだ」

右手を天空そらに掲げて詠唱を始める

「夜天を統べし我が請う。全てを闇へと還さんことを…」

詠唱を進めていくに連れて右手には大きな魔力の塊ができていく

これはアイツや今の夜天の主が使う魔法と一応は同じ魔法だ
だが、あれは劣化版

本来のこれは相手の魔力をほぼ完全に削り切ることだってできる

「さあ、闇に飲まれる…」

そして詠唱を完成させて右手を結界へと向けて叫ぶ

俺の初めての攻撃魔法

「テラ・ラグナロク!!!」

それは大きな魔力の波動となり結界へと向かっていく

結界にあたりそれをすり抜けたのを確認したとき

「ブレイク」

最後の衝撃波を当てる

(今だ三人とも)

そうして三人に指示を出し転移を始める

そして最後に俺が見たのは結界が壊れそこにいたもの全てが魔力に飲み込まれていくところだった。

始まりの戦い（後書き）

一時的に離脱したユエとマテリアル

アルハザードとは一体？そして紫苑やマテリアルたちとの関わりとは？

次回は紫音視点での第11話「魔法の始まり」

魔法の始まり（前書き）

更新せずに放置で本当に申し訳ありません

次からはなるべく早く更新できるようにと頑張りますので

今まで待っていたいただいた方、また感想くれた方など

本当にお待たせしてしまつてすみませんでした

ではお楽しみいただければと思います

魔法の始まり

無事に転移することができたようで今は僕がヤミに指定したポイントに到着している

なんとか逃げ切れたこともありマテリアルたちは、もちろんユエもほっとしている

そんな中セイの声がこの場に響く

「いきなりで申し訳ないのですがあなたは何者なのでしょうか」

「ん…？ああ、そういえばちゃんとした自己紹介はしていなかったか」

「いえ、名前は聞きました」

「聞きたいのはお前とシオンの関係性とシオンが今どうしているかだ」

ああ、そっか

今は表に出てるのぼくじゃなくてユエだし、普段の僕は魔力反応出てなかっただろうしなあ

彼女たちからしたら僕はちよつと人とは変わってるけど魔力は持ってないし一般人だと思ってたんだろうし

まあ、そのとおりなんだけどね

ユエに言われるまでは僕は管理局のことや彼女たちの存在意義なんて知らなかったんだし

だからそこから全部話さなきゃならないんだよね

「そう…だな。うん、ああ、わかった。…安心しろ、とは言わないがとりあえず全てを話すためにはそれにふさわしい場所に移動しよう」

「ここではだめなのか？」

「いや、別にダメじゃねえけどよお、紫苑の奴がどうせなら全部見せたほうが信じやすいっていうからよ」

「シオンと話してるの！？シオンは今どこ！？なんともないの！！」

そうやってライが捲し立てて聞いてくる

心配してくれるのはありがたいけどちよつと過保護…ってか心配しすぎでしょ

よく見ればあまり表に出てないだけでセイとヤミもか…

《お前のこと大好きな三人だから仕方ねえんじゃないのか？》

(でも、僕今回のこと関係なくない？)

《もう忘れちゃったのかよ。テメエはただでさえ自分の家にかいつらがいることバれてんのに、家に来たバカに顔見られてるし、自分で名乗ってるからから弁解のしようさえねえんだよ》

あ…そうだった

ってことは平穩な今までは終わり…か

まあ、みんながいるならいいけど

「どうなんですか…！」

と、あまりにも二人で話しすぎてみんなをほったらかしにしてたよ
というわけでとりあえず『君の体』がある場所ですべてを彼女たちに話そうか

《本当にいいのか？》

(なにがさ)

《本当のことを話してあの時みたいにこいつらに拒絶されたりした
ら…》

(…)

《またあなつて壊れたら、今度はどうしようもないんじゃないか？》

(僕は…拒絶されることは怖いよ)

確かに拒絶されることはとても怖い

それが大切な人たちなら尚更

だけど大切な人たちに僕は曖昧なことを話してまで側にいて欲しいとは思ってない

だってそんな上辺だけの関係しか持てないんだったら遅かれ早かれ僕はあの時と同じようにしてしまう

もう僕は偽りの自分なんか持たない

(今の僕なら大丈夫だよ。キミがいるしね)

《わーったよ。んじゃあ転移するから向こうでの心構えだけしとけや》

(はいはい、それくらい大丈夫だよ)

彼女たちには全て話して…その上でこれからどうするかは決めよう

「と、まあ紫苑がいる場所に飛ぶからちょっと近くに集まれ」

「…わかりました」

三人はしぶしぶといった様子でユエの周りに集まる

しかも三人とも警戒してるみたいだね

それだけ僕のことを信じていて、心配してくれている

「じゃあ飛ぶぞ…ジャンプ」



-
-
-
-
-
-
-
-

俺が三人を連れてきたのは真っ暗な闇の中に十字架とその前に一つ椅子がある場所

その十字架の前には銀色の長い髪をもった人物がたたずんでいる

それを見た3人はかなり驚いているようだが俺はデバイスとして持っていた首飾りを銀の髪の人物につける

それから椅子に座り体を紫苑へと返す

そうすると紫苑の髪の毛も元に戻っていき目をあける

3人は驚きながらもその光景をじっと見ている

「えっと…みんな？」

「本当に…シオン、ですか？」

「うん、そうだよ」

「ユエ…ってのじゃなくてだよね？」

「ユエはあっちだからね」

そうして指さすのは十字架の前の人物

俺

指をさされて動き出す

「俺がユエだよ。さっきの首飾りが俺の意識を積んであるデバイスで今はこの体に移したんだよ」

そうして動き出す

まあ別に言われたから動いたわけじゃなくてようやく体が馴染んできて動いたわけなんだけどな

「じゃあシオンは我らのさっきの言葉や戦闘は…」

「

うん、全部わかってるよ。ユエに必要なことは全部聞いたから」

そうだな

俺が知っていることでお前に教えられることは全部教えた

「さっきの相手のこと、君たちとユエのこと。そして何より…僕のこと」

そう言いながら立ちあがって何も無い空間から一冊の本を取り出す

紫苑はそれを読んでいく

「シオン…あなたは魔法が使えるんですか？」

「ん、そうだね」

「でもあなたに魔力反応はありませんでした」

「普段はユエが封印してたみたい。今は魔力って何なのか、魔法のことだってちゃんとわかってるよ。…自分のことも全てね」

うかない顔をしているな…

まあ、あの本は紫苑の記憶を戻すためのもの

あの3人と話しながらも今の紫苑には俺の話した記憶と本に封印された記憶とでいろいろ考えてるんだろう

これからのこと、そして夜天の魔導書のこと

「うぬのこと、我らに教えてもらえないか？」

「…僕のこと。うん…そうだね。君たちはそのことを知る権利だつてあるし、僕は君たちに知ってほしい」

一息ついて紫苑は本を閉じる

そして椅子に座りなおし指を鳴らす

するとどこからか椅子が3つあらわれて

「君たちはそこに座ってよ。ちょっとは長くなりそうだしね」

どこから話そうかなあなんて前置きしながら紫苑は話し始めた

紫苑の過去と、俺やマテリアルたちとの関係、そして魔法のことについて

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

何から話すにしても前提があるかな

「僕は、シオン・アルハザード。今ある魔法のすべての基を作った人から外れたヒトだよ」

「アルハザードといえば……」

そうして3人はユエをみる

そういえばユエはあの戦いで自分をアルハザードって言ったわけ
まあ間違いではないよね

「そうだね。ユエがアルハザードっていうのは僕が作ったから」

僕が初めて作った心をもったもの

自分がないものすべてを求めて作った存在

「ユエは僕の反存在かな。あの頃の僕のすべてを反対にして作った存在」

「じゃあ、アルハザードっていうのは？それって夢物語な世界のことなんじゃないの？」

「ライの言とおりで。あれは実在しない世界のことだったんじゃないのですか？」

「そうだね。世界のことじゃないから実在しないよ」

そう、世界じゃない

全ての願いがかなうとまで言われるようなそんな夢物語は世界のことじゃない

「アルハザードっていうのは僕個人のことなんだ」

「個人…だと？」

「そうだなあ、何から話そうかな」

僕が作り出したもの、その時の僕の世界のこと、それとも…

「どこからでもかまいません」

「シオンが話してくれることならちゃんと聞くから」

「どんなことでもいいから教えてくれ」

彼女たちは全てを聞くつもりでいる

だったら僕も覚悟を決めよう

「僕の世界のこと。名前はもう忘れちゃった世界での僕の話をしよ
うかな」

僕の世界は僕が生まれたころにはずっとずっと戦争をしているような世界だった

この世界にあるような銃とか剣みたいなのでね

そんな世界で僕の親は研究者だった

いつもいつも効率よく人を殺せるための兵器や薬、そんなものばかり開発・研究をしていた

親譲りだったのかな。僕は3つのころには親の知識や技術より上をいっていた

周りはこれ幸いと僕にいろんな兵器や薬などを開発させた

その頃の僕は本当に子供で何のことかなんてわかってなかったし何かを開発することは普通だった

一年たつても二年たつても終わらない戦争

そんな中僕はいつしか周りの人からしたらありえないものを作ったんだろう

その時は未知なるエネルギーだった魔力と名付けられたそれを僕は見つけ、利用方法も考えた

それから戦争はたった3日で終わった

「たった3日だよ？僕が魔力の使い方を思いついたその3日後には魔力によつて全て片がついた」

「いったい、何があつたというのだ」

「魔力爆弾。今じゃ珍しくないけどカートリッジのようなものに大量の…それこそ次元震レベルの魔力をためる」

「そんなことは…」

「今廃れていつてるだけで可能だよ。後はそれを敵陣にズドン。これだけで何年も続いた戦争が終わった」

「たった一発で戦争が!？」

「そう、たった一発で全てが終わった」

さすがの僕も恐怖した

あの頃は本当に心からいろんな感情が欠落したような状態だったけれどもそれでも、いや…それだから恐怖したのかもしれない

戦争が終わった後父は魔力についての研究を始めていき、僕は与えられていた研究所に引きこもった

外界とはすべてシャットアウトした状態、戦争の功労者となっている僕にはある程度の自由がきいた

そこで僕は僕を一人にしない存在を作ることにした

魔力に意思をもたせた存在…今でいうデバイスのAIやユニゾンデバイス
の形がないバージョンかなあ

「僕は当時それを話し相手とし二人で育ったんだ。それがそこにいるユエだよ」

「ユエって魔力の塊なの!？」

おー驚いてるなあ

「まあ、だから紫苑の体を使ったりできるらしいぞ。詳しいことまで理解してはいないんだけどな」

「それで紫苑はユエと二人でずっと暮らしてたの？」

「紫苑と二人きりだったのは1年くらいだったかな。その後は天の魔導書まどうしょがいたからな」

ユエをベースに創り上げて、ゼロという名前をつけた彼女

そんな彼女ができた頃僕は新しい戦争に巻き込まれた

国内紛争

勝ち残った僕らの国はその魔力の扱い方で政府が分裂し、それが内乱にまで発展

そして両陣営が最初に考えたのは技術者、僕の確保だった

当然だろう

この先魔力をどう使うかだけでも開発者がいればなにかやってくれるだろうという目論見

もし何も出来なくても相手にさえわたらなければいい

そんな思いしかなかったのだろう

どちらの要求も断り続けた僕は殺されかけた

一度や二度じゃない何度も、何度も

僕が7つの時それが変わった

いつも来るような刺客やトラップ

そんなものが一切来なくなった

両陣営共に諦めたのかと思ったその時前の戦争の時に使われた爆弾が僕の研究所に向けて使われた

僕はそれを使われるなんて思ってなくて対策も何もなくこれで死ぬのだと思った

光が収まった僕がいたのは瓦礫の中

研究所だったもののなかにおいて彼女に…ゼロにかばわれていた

『あなたは生きてください。私を創りだしてくれたあなたは…』

僕は彼女のそんな言葉をかけられた理由がさっぱりわからなかった

そうして彼女は僕の上に倒れこんで動かなくなっていました

その時初めて>死くというものを知った

そしてあの時感じた恐怖の意味も知った

だからこそ僕は許せなかった

あの頃の僕の世界はユエとゼロで完結してた

それを壊した国が…世界が許せなくて僕はその時初めてユエの力を使ったんだ

君たちも見たあの魔法>テラ・ラグナロク<をつかった

あれの全力を、条件さえあった状態で撃てば世界だって消すことができる威力を発揮する

あの時の僕は何も考えずにそれを放ち、その世界を壊した

何もない、大地だけが残った世界へと変えた

「それからだったかな。僕は自身を一つの本にして僕を管理する役目としてユエを、本を管理する役目としてアインスを作って新しい世界に旅立ったんだよ」

「それが夜天の魔道書ってやつだ。あのリインフォースだったけか？あいつが本の管理の役目を担っていた」

「じゃあ…私たちを創り出したのも」

「うん、僕になるね。僕の核は本の中でも一番奥においてある。それを守るのに幾つか障害を作らせてもらった」

「それが防御プログラム、守護騎士プログラム、管制人格、そして我々ということですか」

「…うん。君たちは本当の本当に最終手段。出来れば戦ってほしくなかったから」

「戦って欲しくない…だと？」

そつえばどんどん表面に行くに従ってどうでも良くなったよなあ
やっぱり戦うためだったからかな

「僕は最初に君達三人、マテリアルを作ったんだ」

「私たちが最初？」

「君たちは家族。一緒に暮らすために作ったんだけどどんな世界に行っても結局は狙われるはめになってね…最終的に今みたいに強くなっただんだ」

「じゃあその次はどうしたの？」

「あまりにも僕が狙われすぎるから隠れ蓑を作る思いでアインスを管制人格としての役割を果たせるようにして人に貸し出したんだ」

あれはなかなか意思の強い人間だったから大丈夫だろうと思って

「それが夜天の騎士と呼ばれていた人物だね。彼が使っていたから魔導書は夜天の魔導書と呼ばれるようになったんだ」

「それからはどうなっていったの？」

「案外主が狙われるようになってからは僕も狙われなくなったからね。ある程度はユエとアインスに任せて眠りに付くことにしたんだ」

「もしも魔導書に何かあったときは目覚めるようにしておいてな」

「けど、夜天の魔道書は闇の書になってたよ？なんで？」

「あれはバグがひどすぎて僕が出てこれないことが多かったんだ」

「出てきても俺が取り付いていることにすら気がつかず、ずっと平凡に暮らしてる時もあったな」

「そうだね。今回は防御プログラムが壊されたからこそユエのことに気がついてこうして話せてるんだしね」

さて、コレで今までのことは簡単に話した

まあ細かいことまでは話し切れないしこんなもんじゃないかな

「ここまで話したけどなにか聞きたいことある？」

「結局、魔法とはシオンが創りだしたものという認識で良いのですか？」

「うん、いろんな世界を巡っているうちに大体の世界には定着しちやったかな」

セイは納得しながら何かをまた考えている

ただまとまったのか今はいいのかそこで考えるのはやめたようだ

「さて、みんなにほとんど簡単に話したけどこれからどうしたい？」

「僕はシオンとみんなと一緒にいたい！」

「フツ、そうだな。我もお前と此奴等との日常がもつと続くといいと思っておる」

「私はあなた達と共に行く決めています。たとえそれがどんな困難なことになろうとも」

そっか、みんなは僕なんかといっしょにいたいと思ってくれている

だったら彼女たちのことは僕が守らなきゃね

だって僕は守られるだけの存在じゃないから…戦えるだけの力を持

っているんだから

「じゃあやってやろうか。アイツらからどうにかして逃げきるか何かしてね」

「なら紫苑。改めて彼女たちに自分の力を与えておいたほうがいい。魔導書とリンクが切れて少し弱体化している」

「そうだね。それに彼女たちにもあの頃の名前でいてほしいしね」

あの戦いのなかった頃呼んでいた名前

最初に彼女たち三人に与えた名前

「じゃあやってやろう。シュテル」

「私の魔導のすべてを掛けて」

「レヴィ」

「僕はみんなで飛んでみせるさ」

「ディアーチエ」

「小鴉共など敵ではないわ」

「ユエ」

「わかってるよ」

みんながいるなら僕は戦える

だから、やってやるっ…みんなとの平穏な生活を手に入れるためにも

かならず、今度こそ小さな夢だけど…叶えてみせる

魔法の始まり（後書き）

彼らは全て決意した、戦うことを

そのためにやらねばならぬこと必要なことをするため動き出す

今回はマテリアルズ視点の第12話「決戦準備」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3409q/>

闇とマテリアルの王

2011年9月24日20時43分発行